

▼世界の食料需給ひっ迫傾向へ

▼直近の在庫率安定も今後は減少の見通し

農林水産省は「海外食料需給レポート2015」を発表した。世界の穀物需給は近年、期末在庫率が22%前後で落ち着いているが、今後10年間は消費量が生産量をやや上回り、ひっ迫懸念が強まるとされる18%に近づいていくとした。

さらに食料を買い集める中国が日本を抜いて世界第1の食料純輸入国（輸入額が輸出額を上回る）となり、穀物在庫を増大させている状況も発生。食料争奪戦の激化を懸念する声も挙がる。

▼10年後の世界の穀物価格3割上昇と予測

レポートは、最新の穀物の国際需給の動向や国連や各国政策機関が公表した将来予測などをまとめた。2015年/16年の世界の穀物需給は、生産量は前年度を下回るものの、史上最高と予想される消費量をわずかに上回り、期末在庫率は前年比0.2ポイント増の23.0%と見通した。

ただ、今後10年間の需給予測では、世界人口の増加や新興国の経済発展などによる消費増に生産が追いつかず、25/26年の期末在庫率は18.8%にまで落ち込む見通し。天候が平年並みに推移すると仮定しても、25/26年の予測価格（名目価格）は12~14年の平均価格に比べ、トウモロコシ・小麦・大豆・米のいずれも3割近く上昇する見込みだ。

異常気象の多発で米国など主な農産物輸出大国の生産への影響も心配され、市場関係者からは「12年は米国産トウモロコシの生産量が2割弱落ち込んだだけで国際相場は史上最高値を付けた。穀物市場は投機資金の対象でもあり、穀物価格の急騰が国際問題となった08年を超える事態が生じても不思議はない」との懸念が挙がる。

▼影響力を高める中国

穀物需給は、輸入が急拡大する中国の動向が注目されている。特に大豆は、中国国内の消費量の約9割を輸入に依存しており、15/16年度の年間輸入量は8100万トに上る見通し。米や肉類の輸入も拡大中で、中国の農産物輸入額は1414億ドル（14年）と、日本の約3倍となっている。

さらに穀物の在庫量も急増。15/16年度末でトウモロコシと米は世界の5割超を保持し、小麦は4割弱、大豆も2割弱を持つ見込み。在庫過多は財政圧迫につながるが、国内消費が増大する中、国内外の不測時にも自国民に食料を供給できる体制を着実に整備しているとの見方もある。

▼国民一人一人が行動を

日本は、世界第2位の農産物純輸入国で、食料自給率は39%と一部の輸出大国に国民の胃袋の6割を頼っている。経済の動きや異常気象に伴う急激な国際需給の変化に対応できる食料の安定供給体制の確立には、国内生産基盤の維持・強化を基本に、輸入体制と備蓄確保にも万全を期す必要がある。食料自給率・自給力の向上につながる取り組みを国民一人一人が意識することも欠かせない。